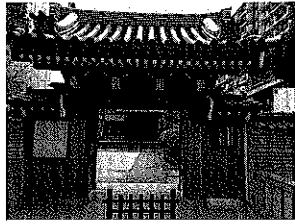
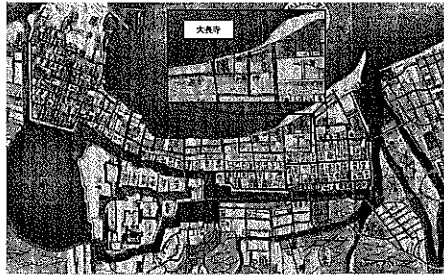


茶の湯文化学会会報 No.89

第89号 / 2016年6月28日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp



大長寺の正面



「福岡古地図」(中村学園大学図書館所蔵)
近隣には現存する少林寺、安国寺も確認できる

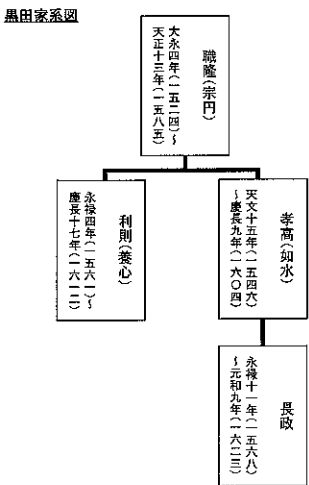
心光山大長寺は福岡天神の繁華街から十分ほど歩いた福岡市中央区舞鶴にある西山浄土宗の寺院である。現在は寺の北側は埋め立てられ街が整備されているが、江戸時代の古地図を見ると当時は殆ど海沿いに建っていたことがわかる。大長寺に伝わる寺史「心光山略記」には「福岡海辺ニ福生山大長寺と申候」との記載がある。

福岡 大長寺と茶の湯 岡 宏憲

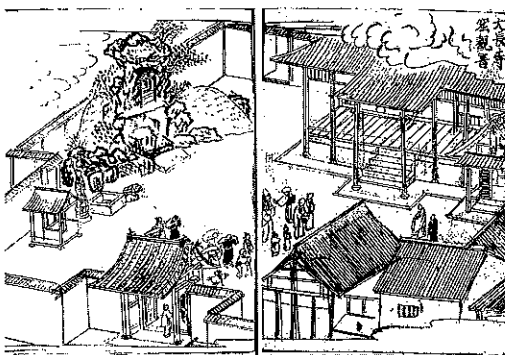
その歴史は古く、「心光山略記」や大長寺所蔵史料「文政三年 今般統風土記御再調子ニ付書上」によると、慶長七年(一六〇二)に「先基」である舜空文徹が野上氏の屋敷を「福生山大長寺」と改めたことが開基とされる。しかし現在の大長寺の山号は「心光山雪幹院」であり「福生山」とは異なる。大長寺には別のルーツがあり、まずはその内容について見ていきたい。

大長寺の「開山」である団空長徹は播磨国出身で、黒田如水(孝高)の豊前国中津入国時や、黒田長政の朝鮮出兵にも同行したと伝わる。その後、黒田長政が筑前国に転封となった際に、裏槽屋郡花津留の称善寺に身を寄せた。またその後、黒田養心(利則、如水の弟)が黒田宗円(職隆、如水・養心の父)のために那珂郡一ノ瀬村に心光山正岸寺を建立、宗円の位牌と肖像画を安置し、そこに団空を呼び寄せた。慶長十四年(一六〇九)の宗円二十五回忌にあたり、「正岸寺小院ニ而難相調」との理由により福岡智福寺にて執り行われたが、これはこの時の智福寺の住侶が団空の弟子空与であった縁である。その節に宗円の肖像画に長政が賛を入れたとされ、肖像画はその後の火災で焼失した

が位牌は現在も大長寺に安置されている。尚、空与は「宗湛日記」の中で神屋宗湛の茶会に長政と同席したことが見られる。



一方、大長寺の「先基」である文徹であるが、元和三年(一六一七)に没したため大長寺は廃寺となっていた。またこの頃、黒田家の家臣団が福岡に入り始めるなど街の整備が進み、正岸寺が一ノ瀬にあつては不便となつたため、その移転先として選ばれたのが大長寺であった。正岸寺から団空が位牌、肖像画とともに移り、元和三年に宗円の三十三回忌が大長寺で執り行われ、山号を福生山から心光山に改めたとされる。そのため大長寺を開いた「先基」は舜空文徹、「開山」(もしくは「開基」)は団空長徹として称される。(大長寺の



【筑前国名所図会】(中村学園大学所蔵)

歴史については守友隆「心光山大長寺と福岡藩黒田氏」(『福岡地方史研究』47号)に詳しい)



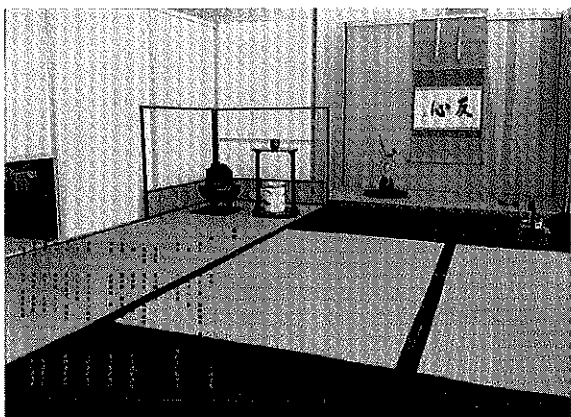
窟観音

に九州芸術工科大学が九州大学に統合されたため、新たに九州大学表千家茶道部として再スタートした。

前身である九州芸術工科大学表千家茶道部は平成十年(一九九八)に創立された。その創始者である向井太氏は、在学中に九州芸術工科大学茶道部(裏千家)に所属していたが、建築家の堀口捨己研究を行うにあたり表千家茶道を習う必要があると考え、一念発起し、大学で表千家茶道を教える方を紹介して頂きたいと、お家元にご電話でお願いをしたという。お家元からは一旦手紙で詳細を連絡するように言われ、自身の研究や建築史の大家である太田博太郎が学長であったことなどを手紙に認めた。その後、お家元から大長寺の河東俊宏氏を紹介して頂き、初めは部員一名でお稽古をしていたが徐々に部員が増加してきた。尚、九州芸術工科大学茶道部の中に裏千家とは別に表千家が出来たという位置づけのため、正式名称は「九州芸術工科大学茶道部表千家」であった。

毎年十一月頃に開催される大学祭では、前身の九州芸術工科大学があった大橋キャンパスにおいてお茶会を開くことが伝統となっている。建築系の学生が多く所属していること

もあり、過去には即席のお茶室「ぎしぎし庵」を設計・製作し、お客様を迎えるといった趣向も凝らした。



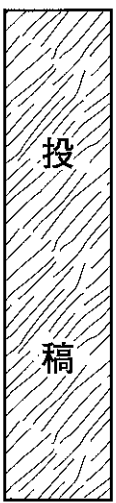
「ぎしぎし庵」ビールケースを並べその上に畳を敷き、周りは角材と障子紙で囲った茶室。ギシギシと音を立てそうな造りであることでそう名付けられた

くしくも九州大学表千家茶道部、大長寺共に創起から一旦変化を遂げる歴史を持つわけだが、来年の平成二十九年(二〇一七)には大長寺は移転四百周年を、再来年の平成三十年(二〇一八)には茶道部創立二十周年を迎える。大長寺及び茶道部の今後の更なる発展を期待している。

さて大長寺と茶の湯の歴史については、先代住職である河東俊宏氏が本山で表千家茶道を学び、昭和四十年代前半に福岡に戻った際に社中でお稽古を始めたことを礎とする。俊宏氏はこの他にも博多工業高校など市内の学校に非常勤で勤める中で茶道部開設に尽力した。現在も大長寺では寺子屋の一環として茶の湯を続けており、社中のお稽古は現住職である河東俊也氏の夫人正子氏がつけている。

大長寺には複数の茶室があり、まずは昭和五十年代に三疊台目の小間「友心庵」が作られた。更に平成八年(一九九六)に黒田宗円の位牌を祀る「垂蔭堂」を建立し、その中に残月亭の写しと松風楼の写しが設けられた。特に残月亭の写しについては「職々亭」と名付けられ、これは黒田宗円の本名である職隆の「職」と、大長寺がある場所が古くは東職人町と呼ばれたことに由来する。

また大長寺では九州大学表千家茶道部がお稽古をしている。筆者が入学した平成十二年(二〇〇〇)当時は九州大学には表千家茶道部が無く、高校時代の茶道部の先生に大長寺を紹介して頂き、そこで活動していた九州芸術工科大学表千家茶道部のお稽古に参加していた。平成十五年(二〇〇三)



庸軒流の「伊藤庸庵」のことなど

廣田 吉崇

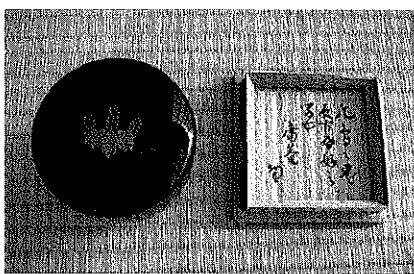
茶の湯点前の比較研究をするために、庸軒流について調べたことがある。しかし、資料が少ないことには困惑した。点前の研究に『茶道望月集』が重要であるだろうと推測はしていたが、この浩瀚な茶書を直接読み解いていくことはまず困難といえる。南葵文庫本の翻刻(茶の湯文化研究会、平成十七年)もあるが、全巻を網羅するものではない。その後、白鷺頭成氏による一連の著書の刊行により、状況はおおいに改善した。とくに顕岑院本『茶道望月集』の翻刻(思文閣出版、平成二十五年)は大変重宝させていただいた。まことにありがたいことである。

ところで、『茶道望月集』を謄写版で翻刻した本が国立国会図書館に所蔵されている。猪股無倦監修『茶道望月集』三冊、庸軒会、昭和二十五年(一九六〇)年である。書誌情報には名前が出てこないが、この翻刻とガリ版切りをした人物は、猪股無倦(英夫)ともうひ

とり伊藤庸庵である。いな、伊藤庸庵の手になる謄写版の庸軒流の茶書の刊行はこれだけではない。国立国会図書館には『茶道望月集索引』昭和二十七年が所蔵されているのみであるが、ほかにも『茶道庸軒流の研究』昭和三十五年、『庸軒詩集』昭和三十八年、『茶道望月集抜萃編』昭和四十年、『庸軒流茶書類集』昭和四十四年の存在を確認している。大部な書物を謄写版で次々と作成した努力には驚かざるを得ない。

伊藤庸庵といっても、今や知る人はほとんどいないだろう。桑田忠親編『茶道辞典』東京堂、昭和三十一年には、伊藤庸庵の項目がある。「明治三二—(一八九九)」現代の茶人。庸軒流。名は毅。紫雲軒と号す。昭和二十四年一月庸軒流増田西庵の門に入る。同二十六年四月庸軒流の茶書『茶道望月集』四十九巻を復刊す。同三十年四月庸軒会を改組す。(八〇頁)と記されている。このなかに登場する「庸軒会」の会報の一つをたまたま入手した。この号(『庸軒会報』第二号、庸軒会、昭和五十六年)により、前会長である伊藤庸庵が昭和五十五年に死去したことがわかる。その略歴としてつぎのとおり紹介されている。「伊藤庸庵師は徳馨の士なり。庸

軒流を志し道を修めること厳にして、その蘊奥を極めるや流祖庸軒翁の心に至らんと全国の庸軒ゆかりの地を歩みて史実を集収研究する傍ら、庸軒流の流れを汲む同好の士を歴訪し、庸軒流の発展は一に当流の親和団結に倚るのみと唱えて、全国に散る庸軒流の組織確立を図る。庸庵師の居常端正、言動篤実、熱誠人を動かし、志を同じくする者相呼応して師の膝下に集い、爾来融陸提携、隆昌往時に比すべくも無きに至れり。庸庵師は亦庸軒翁の文献研究に生涯を賭け、数多復刊を為し、将又庸軒由緒に私財を投じ、時に京黒谷西翁院澱看席修復に奔走するなど枚挙に遑なし。」また、横浜市高島台の住所地において協盛商会有限会社という鉾山業の会社を経営していた実業家でもあった。当時の伊藤庸庵を知る人によれば、藤村庸軒を写した書や、自作の茶碗、茶杓なども多いという。写真



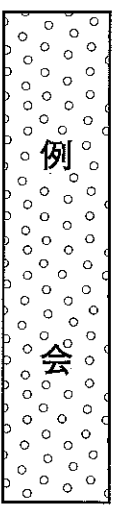
は藤村庸軒好みの凡鳥森写に伊藤庸庵が箱書したものである。なお、伊豆山善太郎「関東の庸軒流」(『茶道雑誌』昭和二十五年第九号、河原書店)のなかで、伊藤庸庵は「先頃大阪、姫路、佐賀等に於て庸軒流の人々を訪問された」(十三頁)と紹介されている。気になるのは「同三十年四月庸軒会を改組す」という記述が何を意味するのからである。庸軒流の全体像を紹介している宮川祐宏「庸軒流」(『日本の茶家』河原書店、昭和五十八年)には、「現在庸軒流には三派七系統が全国にあり、このほか系統不明の方々が各地に点在されています」(二二七頁)とある。おそらく伊藤庸庵は分派分流している庸軒流を流派統合し、庸軒会を免状発行機関にしようとしたものと推測する。ただし、いくら精力的に活動していたとはいえ、三派七系統のうちの一系統の、しかも一門人に過ぎない伊藤庸庵の行動には、既存の庸軒流各流派からの反発も強かったであろう。伊藤庸庵に対するかならずしも好意的でない評価を耳にしたことがある。

風を継承する『庸軒流』とは別な庸軒流の系列ではないかと存じます」(二二八頁)とある。この「二、三」のうちには、伊藤庸庵の存在も念頭にあったのではなからうかと推測する。

しかし、宮川祐宏が「二、三」とのべたからには、ほかにも庸軒流家元があらわれていたと考えなければならぬ。同じく国立国会図書館の蔵書を「庸軒流」で検索すればみいだせる「茶道庸軒流家元既白庵本部」もその一つであろうか。雑誌『庸軒』が昭和四十九年から五十二年にかけて定期刊行され、昭和五十年には安楽島竜仙著『茶道庸軒流』という点前の解説書が出版されている。比喜多宗積派第七代月山は妙心寺塔頭桂春院の住職であるが、比喜多宗積派はその後桂春院をはなれて三つの系統にわかれて存続している。それに対して、桂春院住職代々が家元であるとして当時の住職安楽島竜仙が第十一代家元を称したものである。ただし、昭和五十六年に安楽島竜仙が他界し、しばらくその妻によりつづいたのちに途絶えた。

庸軒流に関する出版物がふえることは喜ばしいことであるが、その一方で忘れ去られるであろう人物のことを思わざるを得ない。白

崑頭成『藤村庸軒をめぐる人々』思文閣出版、平成二十三年、七四五頁以下に掲載されている「庸軒流茶道系譜」において、伊藤庸庵は菅森夢菴系統の一門人にすぎず、安楽島竜仙は記載すらされていない。十分な調査ができないままではあるが、知り得た情報を基に記しておく。



東京例会

(平成二十八年一月三十日)

「十六世紀から十七世紀にかけての茶碗について

— 紹鷗時代の「茶碗」青磁平碗と

— 鼠志野茶碗の技法と制作年代 —

砂澤 祐子

(1) 紹鷗時代の「茶碗」

— 青磁平碗の実態について

室町時代の弘治元年(一五五五)頃編纂の『清玩名物記』記載の名物茶碗の多くは、中国産の青磁茶碗であった。竹内順一氏の論文「紹鷗時代の茶碗」(『武野紹鷗 わびの創造』思文閣出版、平成二十一年)によれば、「刻

み茶碗」とされる輪花形青磁平碗のグループと、「刻みのない」グループに大別されるが、ほとんど現存しておらず、実態は不明である。一方、金沢陽氏は、『日明関係史研究入門—アジアのなかの遣明船』(勉誠出版、平成二十七年)の第五部彼我を行き交うモノ(各論⑩)陶磁器で、中国の文献史料、明時代嘉靖四十一年(一五六二)刊行の鄭若曾著の『籌海圖編』を紹介し、文中の「菊花稜碗・碟」および「葵花稜碗」について、十五から十六世紀の日本の遺跡から頻繁に出土する「菊碗・菊皿」と「稜花皿」とし、名物茶碗と同様の輪花形青磁平碗に相当する日本人の青磁の好みを、中国側が把握していたことを明らかにした。

(2) 鼠志野茶碗の技法と制作年代

美濃焼の鼠志野茶碗は、掻き落としという従来の日本陶磁にはない技法を用いているため、中国や韓国との陶磁技術の影響、交流が想起されている。

近年、十六世紀とされる大分市の中世大友府内町遺跡より彫三島茶碗の破片が出土し、従来十七世紀とされた彫三島茶碗の制作年代が遡ることが判明した。鼠志野茶碗には、彫三島に類似する意匠もあり、十六世紀末期か

ら十七世紀初頭とされていた制作年代についても、倭館開闢以前に制作された朝鮮半島産茶碗の製作地と焼造年代とあわせ、再考察する必要性が一層高まった。

(平成二十八年四月十六日)

「工夫茶の成立に関する考察

— 明清の文献を中心に —

梁 旭璋

一 工夫茶の特徴

「工夫茶」とは中国福建省沿岸と広東省潮州地方のあたりで生まれた喫茶風習である。

嘉慶年間、俞蛟の『潮嘉風月』に工夫茶は初めて記録された。その後、『廈門志』、『白華草堂詩首稽集』、『磔階外史』、『閩雜記』の中に工夫茶の記載が次々と見つかった。工夫茶の喫茶法を簡単にまとめると、宜興壺と白い茶杯を使って武夷茶入れて細かく味わう。

二 製茶法についての考察

『野獲編補遺』より、洪武二十四年、龍團茶の製造は停止され、かわりに芽茶は献上品となった。それから約一〇〇年以降、葉茶の飲用は中国全土に普及した。さらに、明末、閩茶に対する世間の評判が悪くなり、特に江南地方の文人たちは閩茶を軽視する傾向が現

れた。『閩茶曲』より、閩茶が軽視された原因は製茶技術にあると指摘した。

明末清初、武夷岩茶が創製された。『続茶経』、『片刻餘閑錄』、『埭田瑣記』、『閩産異録』の記録より、工夫茶はもともと武夷岩茶の中の準高級の岩茶を指す。

三 喫茶法についての考察

許次紆の『茶疏』の中に記した喫茶法は工夫茶の特徴と共通しているところが多い。遅くとも乾隆年間までに、福建地方の喫茶風習が江南地方の喫茶法の影響を受けて新しい喫茶法が生まれた。『龍溪原志』、『閩瑣記』、『隨園食單』より、小壺と小杯を使って武夷茶を入れてからゆっくり味わった記録が見つかった。この時期の喫茶法はまだ「工夫茶」と呼ばれていなかったが、工夫茶の喫茶法がだんだん定着してきたことがわかった。

「人格教養としての茶道」

岡本 浩一

古くから、茶道は「教養を介した人格的交流の場」とされてきた。本講演では、社会心理学の観点からそのメカニズムについての試論を提供した。

社会心理学の「類似度パラダイム」と呼ば

した。

(平成二十八年五月七日)

「江戸文芸と茶の湯」「不白翁句集」から

石塚 修

江戸の文芸と茶の湯との関わりは、現代人が考えるほど疎遠ではなかった。その作家が茶人であったか否か、なにをもって茶人と呼ぶのか、それは時代とともにかわるはずである。江戸の文学者たちは、今日的な茶人として活躍はしなかったとしても、茶湯の知識がなかったとか、実際を知らなかったと、はたして言い切れるだろうか。

今回は、むしろ茶人川上不白(一七一九〜一八〇七)の『不白翁句集』(寛政一〇・一七九八年刊行)をとりあげ、その句から不白の茶の湯と文学の関わりについて考察したいと考えた。

たとえば、不白が最終的には大島蓼太(一七一八〜八七)に師事したのは、蓼太が晩年の芭蕉が求めた俳風を追い求めたことに共鳴した可能性はないのか。また、俳諧と茶の湯の普及との関連などを、『不白翁句集』の句を『不白筆記』の記述とも比較しながら考察を試みた。

その結果、不白は輪王寺門跡や公家との交流の場においても十分に対応できるだけの和歌の素養を持ちつつも、江戸での茶の湯普及においては、あえて俳諧を取り入れていた可能性の示唆を得られた。江戸での中流町人層にも茶の湯愛好家を拡大するために、彼らに和歌よりも身近であった俳諧を用いて啓蒙にあたったことは、他の茶人とは異なる川上不白の茶の湯のひとつの特質と言えるのではなかろうか。

近畿例会

(平成二十八年五月十四日)

「頼山陽における煎茶についての一考察

— 「桐陰茶寮記」を中心として —

島村 幸忠

江戸時代の文化・文政期(一八〇四〜一八三〇)を中心に活躍した文人たちの多くが、書画や文房のかたわらで煎茶を喫するという行為を日常のなかで行っていた。『日本外史』を著したことよく知られている頼山陽(一七八〇〜一八三二)も、その例外ではない。本発表では、その山陽の茶観について考察していく。すなわち、山陽は茶を煎じ、喫するという行為をいかに考えていたのか、

れる理論と実験群は、もともと精緻に確立された研究群のひとつである。ここでは、人は、自己と他者の類似度を自覚したときに、その他者に対して強い「対人魅力」を感じることを示されている。対人魅力の規定因となる類似度の対象となる属性は、価値観、意見がもつとも典型的なものであるが、宗教的感性、社会経済的地位、保守性—進歩性、被服趣味、体格、所有物、美的感覚など広範におよび、それらの属性に、「外顕的—内潜的」[coercive-in-coercive]の区別を導入することができる。体格、被服趣味、持ち物など、類似・非類似が一見して明かな属性が外顕性属性であり、それと対置的なものが内潜的属性である。また、「死刑廃止論に賛成」「朝鮮出兵に賛成」など、対人関係上、非類似が許容されにくい属性がcoerciveで、不同意が許容されやすい属性がin-coerciveである。

人間どうしの深い共感性の確認、信頼感の醸成には、内潜的か(un-coercive)な属性での類似度の自覚が有用で、茶の湯は、「審美的評価」をつうじて、「美観」という「内潜的か(un-coercive)」な属性の類似度確認の場として、信頼関係構築の機能を果たしてきたのであろうという仮説に関する考察を提供

あるいは、彼がその行為に込めた精神性とはいかなるものであったのか、を明らかにしたい。その際、文政六年(一八二二)に制作された「桐陰茶寮記」を中心に扱うことにする。というのも、この茶寮記こそが、上記に掲げた問いに答えられる資料である、と考えられるからだ。

そこで本発表では、まず、先行研究を振り返りつつ、「桐陰茶寮記」を読み解く意義を示す。次に、その成り立ちを再確認しておく。またここでは、同記の依頼者である小野桐陰についても言及する。そうすることで、山陽の交友関係の一面を示す。最後に、同記において主張されている論点を整理し、山陽が煎茶をいかに捉えていたのかを、彼の芸術論を参照しつつ考察したい。以上の過程を経て、山陽における煎茶の喫茶趣味とは、日常生活のなかで得られる喜びであり、生活の芸術化を実現する一つの重要な実践であることを示す。

例会のご案内

東京例会

平成二十八年七月十六日(土) 午後二時

(会場: 日本大学芸術学部 江古田校舎)

「茶経」における茶の異名について

高橋 忠彦

「秀吉の茶の湯の本質」

中村 修也

平成二十八年九月二十四日(土) 午後二時

(会場: 五島美術館)

「未定」

水田志摩子

「中国から日本に伝来した

三種の喫茶法の呼称について(仮題)」

岩田 澄子

平成二十八年十一月十九日(土) 午後二時

(会場: 日本大学芸術学部 江古田校舎)

「渡辺驥と明治初頭の東京の茶について」

依田 徹

「榮西の将来したもの」

岩間真知子

東海例会

平成二十八年九月二十四日(土) 午後二時

(会場: 名古屋文化短期大学)

「陶祖藤四郎伝説の成立と展開(仮題)」

服部 郁

平成二十八年十月八日(土) 午後二時

(会場: 名古屋文化短期大学)

「近代茶道と田中仙樵」

田中 秀隆

静岡例会

平成二十八年七月二十九日(金)

(会場: 袋井市役所東分庁舎)

午後一時~三時四十五分

テーマ: 「茶文化と経済」

「コスモス館」一階大会議室

「贈答品としてのお茶」

中村羊一郎

「茶産業にはたす文化の役割」

熊倉 功夫

共催: 袋井茶文化促進会・茶学の会・

茶の湯文化学会

参加料: 三〇〇円(当日)

近畿例会

平成二十八年九月十日(土) 午後二時

(未定)

(会場: 未定)

北陸例会

平成二十八年九月十七日(土) 午後二時

(会場: 未定)

(未定)

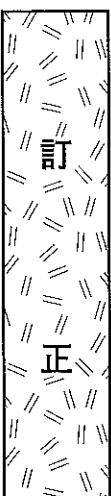
高知例会

平成二十八年九月四日(日)

午前十時~十二時

(会場: 高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「文献研究(未定)」



前号の会報八十八号に誤りがありました。訂正し、お詫び申し上げます。

五頁下段

誤「石田 修」↓正「石塚 修」

六頁上段

誤「名児 耶明」↓正「名児耶 明」